



ニューヨーク州弁護士

アーサー・ミッチェル

親日派で知日派の弁護士、アーサー・ミッチェルさん。東京は世界で一番良いところだと言う。中でも最も素晴らしいのは文化だと。きちっとお辞儀をして相手を尊敬する。丁寧語もあり、言葉でも尊敬する。その一つひとつが非常に大事だと強調する。また、食べ物もお酒も非常に美味しい。特に日本酒が大好きだと語る。
夫人は京都で出会った日本人女性。自宅には夫人の打ち掛けが飾られている。
三千院が大好きで、学生時代、よく訪れた。ニューヨークのマンハッタンの手造りの庭には、紅葉も植わっていて、三千院を彷彿とさせる京都の風情が漂っている。
日本と日本人を愛し、54年間、日本で見つけたミッチェルさん。ミッチェルさんの目を通した日本人の良いところ、これから変えていくべき点などの指摘は、われわれ日本人に大きな気付きと自信を与えてくれる。

日本人は、何でぎもぎもいる。ビジョンを持ってストーリーを描き、動くことが肝要

グローバル化の中、われわれ日本人は自分たちを見つめ直し、前進していかなければならない。日本を長年にわたり見てきたアメリカ人、アーサー・ミッチェルさんにそのためのヒントをいただく。

幼少より世界各国を回った経験から培われた人間力

伊藤 アーサー・ミッチェルさんは、弁護士として、これまでビジネスの世界でさまざまなお



聞き手 伊藤千恵 本誌社長

仕事をしてこられました。
まずミッチェルさんのこれまでのご経歴とお仕事についてお聞かせいただけますでしょうか。
ミッチェル 私は74年前にカリフォルニアで生まれました。父親は医者でしたが、旅行が好きで、私も一緒にあちこち旅行しました。日本に初めて来たのは1961年、14歳の時です。世界一周旅行をしていた時で、東京、京都、大阪、奈良に行きました。また日本がどういう国かあまり知らなかったの、朝食で海苔が出てきた時、「日本人は紙を食べる」と思ったんです。海苔が紙に見えた(笑)。そして生の魚。これも抵抗がありましたね。
その後、18歳の時に旅行でもう一度、日本に来ました。そして、カリフォルニア大学3年の

時に留学ができることになったのですが、その選択肢としてヨーロッパだったらフランス、スペイン。でも私はフランス語もスペイン語もできなかった。ほかの選択肢は香港か東京。中国の歴史の先生がたまたま中国の方だったので相談したところ、当時アメリカ人は、香港には行けたけれども中国本土には行けなかった。それでその先生は、「東京に行きなさい」と。なぜかと言うと香港はイギリスの植民地だったわけで、本当の中国じゃない。でも日本に行けば、一般的な日本人たちと付き合えるということに勧められました。
幸い日本では、いつも親切な方にお会いしました。例えば大学の時、ホームステイをしたと思うのですが、当時はそういう制度が日本